古き朝鮮の最後と新しき朝鮮の初めを見た

高橋喜一　鹿沼市

茨城県久慈郡大子町という所で生まれました。袋田の滝で有名です。当時は久慈郡生瀬村大字内大野（うちおおの）という村で、そこで昭和５年の５月に生まれましたが、まもなく私の父が９月に亡くなってしまいました。

父の亡くなった理由ですが、昔、神社で奉納相撲というのをやっていました。私の父はなかなか強く、次々と向かってくる５人を打ち負かす「５人抜き」を何度も成功させていました。しかし、その強さがねたまれるようになり、４人目の人が組み付いている最中に５人目の人も加わり、いいように投げられて後頭部を打ち付け、後にそれが原因で亡くなったのです。母は実家に帰ってしまい、私はおばあさんに育てられました。

おばあさんは優しい人で、一所懸命自分の子どものように育ててくれ、それで現在の私があると思っています。とても感謝しています。

●見知らぬ世界に希望をもつ

生瀬第一国民学校の高等科２年（最終学年）、現在の中学２年生（15歳）の時に、学校に朝鮮での鉄道員の募集がきました。現在は朝鮮半島は韓国と北朝鮮に分かれていますが、当時は「朝鮮」という一つの国でした。この募集の話に興味を持ちました。その当時の田舎の閉鎖的な社会の中で、親がいないということで、何かと肩身の狭い思いがあったのです。今の環境から逃げ出して遠いところに行きたい、だれも知らない世界で、思う存分自分の可能性を試してみたい、という気持ちが胸いっぱいにあふれました。あの頃は日本が朝鮮を支配していたから、朝鮮に行けば、日本人はとても出世が早く、どんどん偉くなって大事にされると聞いていました。

試験はなく、希望すれば行けたのです。学校の同級生３人を含めて、全国からこの募集で約30人ぐらいが朝鮮に行きました。

昭和20年３月24日、汽車で茨城を出発しました。途中、特に夜、汽車がパタッと止まることがある。そのうち、汽車がバックを始める。何事かと不審に思っていると、トンネルに入って止まる。空襲で爆弾を落とされるため、近くのトンネルの中に避難したというわけです。そういう事を繰り返しながら、どうにか九州の博多まで行きました。連絡船に乗って韓国の釜山（ぷさん）に着き、それから汽車で目的の京城（現在のソウル）に着きました。５、６日くらいかかったかもしれない。30人いた仲間は釜山で二つに分かれ、私たちはソウル、もう半分は漢口という所にいきました。漢口に行った人たちは、後でえらい目に遭ったということです。私らは南だったから、アメリカの占領下に、漢口はロシアの占領下に入ってしまったんです。私らよりも苦労したという話を聞きました。

●朝鮮での鉄道学校

ソウルでは鉄道学校の寮に入りました。朝鮮総督交通従事員養成所という名前の、朝鮮の鉄道員として働くための日本の学校。勉強が終われば、各駅に配置して駅の助役になるとか、駅長さんになるとか、日本人にエリートコースを歩かせるための学校でした。

学校では、機関車の仕組みとか、運転の仕方とか、鉄道に関するいろいろな勉強をしていました。１両の動力がない貨車だけがすーっと動いていって、先にある貨車にがちゃーんと連結させる、そういうやり方とか勉強しました。無線はなく、赤白の旗を持っていて、旗を上に上げた場合は、ブレーキかけろ、赤い旗を横に振ったらどんどん進めろ、そんなふうな手旗信号も習った。機関車は石炭で走っていたから、石炭をくべる練習もしたし、構内では貨車、客車の入れ替えとか、そういうのまで勉強したんです。入れ替えはなかなか難しいんですよ。

学費は全部国で出してくれたし、医療費も出してくれた。

●日本が負けた

8月15日、終戦の日、その日は皆たまたま学校にいました。先生が玉音放送をみんなで聞きましょう、と言って教室で聞いたんです。何を言っているのかさっぱりわからなかった。ただ先生は「日本は負けたぞ」と言った。「すぐに寮に帰れ、寮から絶対に外に出るんじゃないぞ」と言われて、急いで寮に帰ってきました。寮があるのはソウルの駅のすぐ裏手で、一駅行ったところに学校がありました。

言われるままに寮でじっとしていたけれど、そのうちソウルの駅前がすごくにぎやかになったので、何だろうと思って、寮の窓からそっとのぞいてみました。

駅前の広場はとても広く、駅の周りにはビルがいっぱい立っていて、それはほとんどが日本の企業です。ビルに掲揚されていた日本の国旗、日の丸を取り外し、足で踏みつけたり、ビルの看板を、朝鮮人が無理やりはがしています。はしごを掛けたりしてバリン、バリンはがし、駅前の広場に山のように積んで火をつけるんです。日本の看板という看板をボンボン燃して、炎が山のように高く上がっていました。1万人くらいの人が集まって、気勢を上げていたのです。

あれにはびっくりしました。あの時の光景はいまでも頭の中にしっかりこびりついてます。私たち日本人は、何をされるかわからない、という恐怖、驚き、これからどうなるんだろうという不安でいっぱいです。

それから3、4日過ぎころ、北朝鮮から日本人が逃げてくるのを見ました。汽車など乗れないから徒歩で逃げてくるんです。女の人はみな坊主頭にしたり、ゲートルを足に巻いて男のような恰好で、女に見えないようにしていた。服も当時の国民服を着て、多くの人々がソウルの駅前に集まってきました。その光景は子供ながらショックでした。

とにかく南朝鮮まで行けば何とかなるという思いで、男のように見せて、食うや食わずで命がけで歩き続けてようやくソウルに着いた果てに、食べ物がないですから、餓死です。せっかく逃げてきたのに死んじゃうんです。何人も広場の片隅で亡くなっていたあの光景は今でも頭から離れません。そういうのを見ていて私らは言葉がありませんでした。

●生活のために働く

今まで学費も生活費も国で出してくれていましたが、8月15日を境に食糧から何から、全部止まってしまった。私らは寮にいたが、とにかく食わなくちゃならない。いくらかでも金をもらえるからと寮長さんが働き口を見つけてくれました。

駅の近くに大きい電話局があって、その電話交換手の仕事です。仲間30人は全員交換手として1か月くらい働きました。その当時の電話というのは、壁にいっぱい穴があって、穴の所にパッと電気がつく。そこに線の片方を差し込んで、自分のイヤホンで聞くと「何番、つないで」という。下の方の穴の番号にもう片方を差し込んでつなぐと連結する。ところが、慣れないからそれがうまくできないんですよ。つなぐのが間違ったといって、年中怒られました。それでもなんとかお金をもらって、寮長さんがやっとおかゆを作ってくれて食べた。しかし腹がいっぱいになることはありませんでした。

それでそっと寮を抜け出して駅に行くんです。貨物がいっぱい重なっている駅の貨物ホームへね。大豆を絞って油を取って残った、直径30、40チン、厚さ8チンくらいの円盤状の油カスがあって、本来それは肥料用でした。それをそっと他人に見つからないように行って、削って食べました。腹が減って、減って、どうしようもなかったんです。食べられるだけ幸せでした。

結局、交換手の仕事はクビになってしまいました。

学校での鉄道の勉強は全部日本語でした。ところが8月15日正午から、韓国語の世界になった。それまでは韓国語なんて全然聞いたことがなかった。町に出ても韓国人も日本語を話していたのですから、韓国語があることさえ知らなかった。終戦の正午過ぎ、騒いでいる人はみんな韓国語でしゃべっていた。あれれれ…こういう言葉があったんだ、と気づきました。みんな我慢していたんですね。

●朝鮮人が炊いてくれたご飯に嬉し泣き

日本が負けたとたん、学校にはお金が来なくなったので、暮らしに困りました。自分のかぶってる、国からもらった布団とか寝間着とか、そういうものを朝鮮人のうちへ持っていくといくらかの金になり、それで食べ物を買いました。そうこうするうちに最後は枕まできれいになくなってしまったよ。

あるとき寮の近くの朝鮮人のところに布団を持っていったことがあった。「ああ、買ってやるよ。お前ら、ちょっと待ってろ」というので、言われるままに待っていた。なんと、その朝鮮人が米のご飯を炊いてくれたんです。3人にそれぞれ茶碗に、真っ白い米のご飯を盛ってくれた。そんなもの食べたことがありませんでした。目がつぶれそうな真っ白いご飯の有難さといったら…あの時は涙が出ました。その朝鮮人の前で泣きました。ご飯の有難さ、朝鮮人にもこういう人がいるという嬉しさ。真っ白いご飯、麦など全然入ってないご飯。

日本にいる頃は、麦の入ったご飯を食べたことは少しある。そのうち麦のご飯も食べられなくなって、やがて配給制度になったが、量が足りないのでサツマイモを作って食べていました。大体、サツマイモを食べていた記憶があります。トウモロコシ作ったりね。

そういう人もいる一方、学校で一緒に学んでいた朝鮮人の生徒に怒鳴られました。「お前ら、もたもたしてるんじゃないぞ。今度はお前らと俺らが戦争するんだからな！」今まで蔑んでいた朝鮮人だったが、戦争に負けて立場が逆になったのでこんなことを言われた。大人になって立派な兵隊になって、今度は日本をやっつけてやるからな、とこんなことを言う朝鮮人もいたのです。

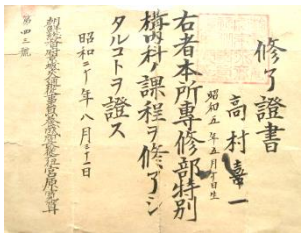
●ソウルでは空襲はなかった

空襲のようなことはありませんでしたが、B29の飛行機はソウルでも見ました。日本の兵隊が高射砲で応戦していたが、飛行機には全然届かず、はるか下の方でバーンと爆発するだけ。飛行機は爆弾を落としたりすることはなく、様子を見るだけのようでした。勝つというのはわかっていたのか余裕だった。あの当時、ソウルの空を胴体が二つある飛行機が飛んでいるのをよく見ました（注：ロッキードP38ライトニングと思われる）。空襲警報は鳴りました。

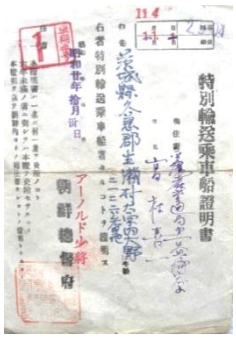
●引き揚げ

引き揚げで船に乗るためにソウルから釜山の駅まで貨車に乗りました。船に乗るまでの間、3日くらいでしたか、駅の中にはいられないので、線路がいっぱいある構内の片隅で皆で休んでいたときのことです。一緒に行った生徒が線路に足を延ばして寝入ってしまった。そこへ音もなく貨車がすーっときて轢かれ、足首を切断してしまった。そういう人がいたことも忘れられない思い出です。

11月14日に茨城に着き、おばあさんの手伝いをしながら米や麦、大豆などを作って暮らしました。主食はほとんどがサツマイモ。米は供出米として皆取り上げられてしまった。たとえば、10俵の米のうち9俵は取り上げられてしまうという時代でした。



鉄道学校の修了証書
予定通りに行けば 1 年くらいで卒業するはずだった。その証書には卒業したように書いてあるが、終戦になったので、内地に帰ってきてから、少しでもこれが役に立つようにと便宜を図ってくれたわけである



特別輸送乘車船証明書
パスポートのようなもの。これを見せて日本に帰って来られた。進駐してきた担当の人か、朝鮮総督府、アーノルド少将の印がある

予防接種証明書
チフス、天然痘の接種を受けた。右下に U.S.Army とある

鉄道学校の先生たち
その頃は写真なんて撮るどころではなかったけれど、朝鮮時代の写真はたまたま 1 枚だけ残っている。学校の先生たちの写真。線路がいっぱい見える右側にソウル駅、広場はさらに右になる

●青年会誌に寄せた一文

帰国してから約 1 年がたち、内大野青年会誌「新生」（昭和 22 年 1 月発行）に次のような文を寄せました。16 歳でした。

＊＊＊「終戦のあくる日を朝鮮で迎えた追憶」

私は京城にあって、古き朝鮮の最後の日と新しき朝鮮の最初の日を迎えた。湧き上がる歓喜をたたえた民族の相貌を見た。これはまさに革命でありました。その痛烈な印象は朝鮮とともに生きてきた在留邦人にとって生涯忘れがたい痛烈な記憶となるに相違ないでしょう。京城の空には数十機の艦載機グラマンが乱舞していた。駅前広場には、あたかもこの時刻に入場してくるホッチ中将麾下の米軍隊第 24 軍を迎える数万の朝鮮人が米鮮両国旗をかざして万歳の怒涛を打ち返していた。今にも柵を突破って構内になだれ込んでくるかと思われるほどのものすごさであった…

8 月 15 日午後、阿部信行総督以下総督府の役人は講堂に集合して厳粛なるあの放送に胸を打たれた。壇上に立った阿部総督は曇った声で数語を発したが、こみ上げる万感を制し得ず、無念の涙で告辞を中絶しなければならなかった。しかし 15 日になると、にわかに情勢が変化した。朝早くより朝鮮建国準備委員会の人々が来て総督府の接収を要求し、朝鮮統治の大権を渡されたいと迫った。これと前後して京城駅へ向かっておびただしい人の奔流が堰を切ったように流れ始めた。赤旗を打ち立てて万歳、万歳と連呼していく青年たちの形勢がものすごいと思う間もなく、興奮した群衆が万歳の怒号を爆発させながらもう車道、人道の区別なく、到底近寄りがたき熱気を発散させた。我らは外出を禁止された寮室に引きこもり、ただ茫然とこの様子を見ているほかはなかった。したがって、内地人一人として道路を通行する者はない。大きなのぼりや旗が無数に通り過ぎて、踊る文字は「朝鮮独立万歳」であり、「自由解放万歳」であり、「歓迎ソ連軍」であった。話によると、1 時ころ、京城駅にソ連軍の先鋒が到着するので、これを迎えに行ったのだという。時刻が移るにつれて人数もますます増加し、駅前に集って鯨波の声を上げる朝鮮人は十万人に達したかと思はれた。市内の交通機関はほとんどいっさい朝鮮側に占有された。来る電車も万歳万歳、人々が窓からはみ出さんばかり、屋根の上からもこぼれるほど。日本語で電話を掛けると「裏切者！」と切られてしまう。ある所では鮮人の女がはいていたらしいモンペが群衆の前でずたずたに引き裂かれてしまったという。我らはただ、死を覚悟するのみだった。今こうしてあの日のことを考えると

ぞっとする。また、一つの夢であったような感じがする。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

戦争のために飲まず食わずの体験をしましたから、ちょっとくらいの辛いことがあっても、あの時のことを思えばどうってことはない、と思える。今の世の中とは天と地くらいの違いがある。戦争の惨めさを体験した人にとっては現在は天国ですよ。

鹿沼には、おばさんがこの家に嫁に来たが、子供がなかったので養子になって来ました。

人生において貴重な体験をしたと思いますが、もう二度と戦争はごめんです。平和な暮らしが続くことを強く望んでいます。

〈二〇一六年５月お話を伺ってまとめました〉

〈参考〉

一九一〇年８月29日の大日本帝国による韓国併合から、一九四五年９月９日の朝鮮総督府の降伏まで、35年間日本による統治が続いた。

北朝鮮と韓国

一九四五年８月９日、大日本帝国に宣戦布告したソ連は満州と朝鮮半島北部に侵攻を開始した。この状況を受けてアメリカは対応を検討し、ソ連軍が単独で朝鮮半島を占領する事態を防ぐため、ソ連に対し半島の分割占領案を提示する事が決まった。８月10日から11日にかけて国務・陸軍・海軍調整委員会において「北緯38度線で分割する」という案が画定され、トルーマン大統領の承認を受けた。この案はソ連側に提示され、８月16日にソ連はこれに同意する。８月17日には38度線以北の日本軍はソ連軍に、以南はアメリカ軍に降伏することが決定された。